

昔の人はよく人生を旅にたとえました。忙しい日々の中で、いつも何かに追われるように生活していると、あらためて振り返って、自分の人生を考えるなどという暇もゆとりもありませんが、そういう私たちにも、何かの折に、ふと自分の人生を振り返るチャンスがないわけではありません。人生の節目と言われるような折には、私たちも自分のそれまでの人生を、自分が歩んで来た道のり、自分の人生の旅路として意識することがあります。時間の流れの中を生きる私たちは、一日一日の私たちの生活を律する時間の流れと、その日々の経過が節目、節目によって区切られることによって、振り返って顧みることができるもう少し長いスパンの時間の流れの中に生きています。私たちがカトリックの信者として自分の信仰を意識できるのは、振り返って顧みることのできる時間の流れの中に身を置く時です。何故なら、私たちを追い立てるように、外から私たちの生活を律する日々の時間の流れの中では、私たちは多くの場合、自分の心の思いを押し殺しつつ生きざるをえないからです。

今日の福音は、イエスとともにあって、押し寄せてくる人々のイエスへの求めに対応する弟子たちの多忙な日々を節目を画することになった、イエスと弟子たちとの対話を伝えています。場面はイエスの祈りによって始まります。ひとり神に祈るイエスの姿が、弟子たちに休息のときを与えます。祈るイエスとともにいることによって、弟子たちは日々の雑事から解放された安らぎを感じていたことでしょう。祈れなくてもよいのです。祈らなくてもよいのです。自分たちの側で祈っておられるイエスとともにいることによって、弟子たちは自分たちを追い立てる日々の時の流れから解放されているのです。そのような私たちの生活を追い立てる時間の隙間から、イエスは弟子たちに語りかけられます。

「群集は、わたしのことを何者だと言っているか」。そして、「あなたがたはわたしを何者だというのか」。この問いによってイエスは弟子たちに、彼らがそれまでの生活の全てを後に残して、イエスのあとにつき従って来たイエスの弟子としての旅路を振り返らせておられるのです。「何を思って、何を期待して、君たちはわたしの後に従って、わたしとともに歩んで来たのか」イエスはそう問いかけておられるのです。周りの人々が何と言おうと、「私たちはあなたがメシアであると信じたから、私たちはあなたの後に従って、今までこうして歩んできたのです」ペトロは皆の思い代弁するようにこう答えます。彼らを弟子として召し出されたイエスは、人々への奉仕に明け暮れるイエスに従うことの疲労の中にある弟子たちに、イエスに従って歩んできた彼らの旅路を振り返らせてくださるの

です。何のためにここまでイエスとともに歩いて来たのか、自分たちの人生の歩みを再確認させようとしておられるのです。そしてまた、そのイエスは今日の福音を通して、イエスを信じる者たちとされた私たちをも、信仰者としてのそれぞれの自分の人生の旅路を振り返るよう招いておられるのです。

この世の旅路の過程にあるかぎり、私たちが向かえる人生の節目は、どれをとっても、それまで歩いて来た人生の一つの到達点ではあっても、同時にそれは、その節目を迎えることによって新たに生きはじめる更なる人生の旅路の出発点となります。ペトロのあの信仰告白は、イエスと出会い、イエスに呼ばれ、イエスの弟子として歩いて来た弟子たちの歩みの一つの出発点をなしています。イエスとともに歩いて来て、イエスが語る福音のみことばにお側近くから耳を傾け、イエスが行われる驚くべきみわざの数々を目の当たりにしてきた弟子たちが到達した、イエスに従う弟子たちの、弟子としての人生の一つの重要な節目をあのペトロの信仰告白は示していると言えます。

弟子たちとともに歩み、弟子たちを導いてくださるイエスは、ご自分の祈りの中に弟子たちを招くことによって、弟子たちがそれまで到達した人生の歩みを越えて、更にイエスとともに歩み続けるべき、新たな人生のステップを切り開いてくださいます。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」。イエスは私たちの人生の節目、節目にともにいてくださり、私たちが歩み始める新たな人生のステップを、ご自分に従う弟子としての人生にしてくださいと、私たちをも招いておられるのです。

私たちが歩み始める新たな人生のステップが、私たちにとってどのようなものであろうとも、イエスの弟子として生きようとするものにとっては、イエスのあとに従って、イエスとともに歩み続ける人生の旅路であることに変わりはありません。自分の人生を意義あるものとして、最終的に自分の生きた人生とするためには、自分の人生を自分のためだけに生きてはならないのです。イエスのみあとに従う弟子たちに求めておられる第一の要求は、自分を捨てることです。このようにしてしか、私たちは自分の新たな人生のステップに踏み出すことは出来ません。このことは、イエスに言われるまでもなく、私たちもそれぞれの人生の経験を通して知っているはずのことです。独身の気楽さを捨てる覚悟が出来なければ、結婚に向かって踏み出すことは出来なかったはずで、子育てに追われることのない、自分たちだけの生活を楽しむゆとりを捨てる覚悟が出来なければ、親となる喜びを知ることは出来なかったはずで、

人生の節目を迎え、新たなステップに踏み出そうとする私たちをその都度、弟子たちに対してそうされたように、イエスはご自分がたどられた十字架の道へと招いておられます。イエスにとっての十字架は、仕える者となって人々のために生きたイエスの愛の生き方の極致の姿です。自分のためではなく、愛をもって

人々に奉仕して生きる生き方を貫けば、自分の全てを投げ出し、与え尽くすことにならざるをえません。イエスのあの十字架をイエスが受け止められたように理解しようとするれば、それは決して、イエスの運命を襲った悲劇の死ではなく、イエスの人生がそこに極まる、イエスの生き方の到達点であることが分かるはずです。十字架を目指して歩まれるイエスは、そのような生き方へと弟子たちを招き、私たちを招いておられます。それが、父なる神によって、人の子となられたイエスに、そして私たち一人ひとりに託された私たちの人生の使命だからです。そのような生き方の到達点としての十字架こそが、私たちの人生の最終目的地である、永遠のいのちを目指す復活への入り口となるからです。

今日の主日、私たちの上を流れる一週間ごとのこの節目の日に当たって、私たちの生き方を振り返り、イエスに従う者たちとしての新たな目標を見定めることによって、イエスに力づけていただきたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高